

21 世紀の眼科基本診療をめざして

西暦2000年も残すところわずかとなり、21世紀を目前にしたこの時期に「眼科基本診療Update—私はこうしている」を発刊することになった。実は1991年に、「眼科基本診療—私はこうしている」というタイトルで「臨床眼科」の増刊号が発刊されており、今回はそのUpdate版ということになる。編集者としては、現代の眼科基本診療の水準を明らかにし、来たるべき21世紀の眼科診療に備えるべく決定版ともいふべきものを目指したつもりである。そのため、現在眼科診療の第一線でご活躍中で、豊富な経験と高い見識をもっておられる先生方に得意分野のご執筆をお願いした。

1990年代の日本は長期不況に見舞われ、社会や経済あるいは産業の構造改革も進まず、俗に“失われた10年”といわれている。しかし、1991年に発行された「眼科基本診療」と今回の「眼科基本診療Update」を比較していただくと明らかなように、各先生方には記述を必要最小限にお願いしてもなお、頁数の大幅な増加をみるようになった。眼科に関する限り、1990年代はまさに輝かしい変革を遂げた10年といっても過言ではない。

診断技術の面では、従来からある検査装置に加えて、MRI、OCT、UBM、角膜トポグラフィ、ICGなどのさまざまな画像診断技術が加わり、診断精度は飛躍的に高まっている。また、近年急速に進歩している分子生物学的

手法や遺伝子診断も次第に基本技術になろうとしている。

一方、治療の面では白内障、緑内障、網膜硝子体手術など、あらゆる領域で目覚ましい発展を遂げていることはいうまでもない。白内障手術では超音波乳化吸引術を用いた小切開手術が基本となっているし、緑内障手術では代謝拮抗薬を併用した濾過手術や線維柱帯切開術を基本としながらも、術後合併症を極力少なくするために非穿孔線維柱帯切除術などの新しい術式も試みられるようになっている。硝子体手術の領域の発展もまさに目を見張らせるものがあり、黄斑部疾患も手術治療の対象となってきている。薬物療法の面では、緑内障治療薬を中心として、最近画期的な薬剤が次々と臨床応用されるようになり、薬物療法における第一選択薬も大きく変化している。

屈折矯正手術の最近の進歩と手術件数の増加にも特筆すべきものがある。屈折矯正手術は、元来正常な角膜組織や水晶体に手術操作を加えるもので、依然として根強い反対論があるのは事実である。しかし、今年厚生省がエキシマレーザーを用いた角膜屈折矯正手術を一定の条件下で行うことを認可したこともあり、PRKあるいはLASIKを行う施設が急激に増加する気配にある。屈折矯正手術の適応の決定と施行は慎重の上にも慎重に行う必要があることはいうまでもないが、眼科専門医が主導権を握って進めて行く必要があろう。

水流 忠彦 (自治医科大学眼科学教室)

21世紀の眼科では屈折矯正手術の問題は避けて通れないもので、同手術に関する基本的な知識は今後とも必要とされることは間違いのないと思われる。

最近わが国では情報技術 (IT) 革命なる言葉が氾濫している。日本政府も、すべての国民がデジタル情報を自由にやりとりする「日本型IT社会」を実現するための国家戦略を策定する方針を打ち出している。大量の情報を低価格で交換できる超高速インターネットを整備し、5年後には日本を情報通信の最先端国家に仕上げると宣言している。はたして、政府の計画どおり進むか否かは不明だが、いったん目標が決まると一丸となって突き進む日本人の民族的性格からすると実現する可能性はかなり高い。21世紀初頭にこのような情報化社会が到来するとすると、眼科を含めた医療の世界も大きな変革を迫られることになるのは必至である。政府は2003年度までに政府の完全電子化を図るとしていることから、医療情報や診療録が電子化される可能性が高い。また、全国民がインターネットの恩恵を受けるようになると、さまざまな医療サービスがオンラインで行われるようになる可能性もある。診療の予約や相談、処方箋や診断書の発行、医療費の支払いなどはオンラインで行われることが普通になるだろう。イ

ンターネットの影響は、単に医療広告の是非などのレベルを遙かに超えることになるだろう。

21世紀の眼科がどのような形になっていくかはわからないが、視覚情報の価値は一層高まり、高いQOL (quality of life) を実現するために、高いQOV (quality of vision) が求められることになるだろう。その結果、眼科が国民医療に占める重要性は一層高まるものと考えられる。情報化社会にあつては、国民あるいは患者はより高いサービスを求めてくるものと思われる。医療を行う側としては、消費者としての患者優先と世界標準の治療内容の実施という基本的な考え方を徹底していく必要があると思われる。

しかし、このような時代にあつても重要なことは、本質的に変えてはいけない部分と根本的に変更していく必要のある部分とを明確に区別することである。たとえば患者側からのニーズがあつたとしても、専門医としての確固とした信念と知識に基づいて診療を行う必要があることはいうまでもない。医療の基本はやはり基本として受け継いでいく必要がある。

本書が21世紀の眼科基本診療をめざしておられる先生方の知識の整理にお役に立つことを心から願っている。